# 風土記

＜高知県立歴史民俗資料館＞　第３号　1992年3月20日


## ばぶれ遍路


高知小津高等学校教諭　坂本正夫


白衣の装束に手甲・脚絆・頭には菅笠をかむり、手に金剛杖と数珠を持ち、八十八ヵ所の札所を巡拝するお四国遍路。いまはマイカーやバスを利用し遊山気分で巡拝する者が多いが、古くは宿泊施設も少なく、沿道の人びとの善意にささえられたお接待や善根宿の提供を受けながら、てくてくと歩く難行苦行の旅であった。

このお四国遍路を以前はヘンドと呼んでいたが、これは辺土（遍路）の巡礼という意味だといわれている。四国遍路の起源については諸説があるが、いずれにしても初期の遍路は聖、六部、山伏などの遊行宗教者であり、一般庶民が参加するようになったのは近世に入ってからであった。近世後期以降、日をおいて一国ずつ巡拝する一国めぐりや村四国、島四国巡り、あるいは近在の五ヵ所、七ヵ所巡りなども行われるようになり、ますます多くの遍路がみられるようになったが、ここではあまり知られていないばぶれ遍路を紹介してみよう。

竹林寺の石段を登る
現在の遍路

ばぶれ遍路というのは、高知県吾川郡春野町の若者たちが昭和戦前期まで行なっていた七ヵ所遍路のことで、バブレはおどける、ふざける、し放題する、あばれることなどを意味する土佐方言である。

集落内の気の合った若者たちがグループを作り、旧暦三月二十日に近くの三十四番札所種間寺（春野町秋山）に詣り、逆回りで三十三番雪蹊寺（高知市長浜）、三十二番峰寺（南国市十市）、三十一番竹林寺（高知市五台山）、三十番安楽寺（高知市洞ヶ島）、二十九番国分寺（南国市国分）と詣り、翌二十一日は三十五番清滝寺（土佐市清滝）に詣でて終る。国分寺へ行かずに三十六番青竜寺（土佐市竜）へ詣るグループもあった。

出発の二、三日前から精進生活に入り、前夜はグループごとに当屋に集まって弁当を作る。巡礼中の服装は奇抜なものでよく目立つようにし、高さが三、四寸（九～十二センチメートル）もある高下駄を履いたりする者もあったが、これは人目につくところで履き、道中では普通のわらじを履く。道中には渡し（橋）があって渡し賃を取っている所もあったが、そんな所では「一銭、二銭がないではないが、百円札ではお釣りがないろう」などと大声でわめきたて、わざと川に入ってずぶ濡れになって渡ったりすることもあった。「お大師さんはばぶれ遍路が好きじゃから、旧暦三月にはなんぼうバブレてもかまん」といって巡礼中は娘をからかったり、奇声を発したり、唄をうたったりしてバブレていた。

村に帰ると、グループごとに当屋や川原で結願の宴を開いて大騒ぎをしていた。このときにはよく喧嘩があったが、「お大師さまは若者の喧嘩が大好き」だといっていた。

ばぶれ遍路は昭和十三年を最後に廃絶した。春野町以外ではばぶれ遍路についての話を聞いていないが、他の地域でもあったか否かは不明である。

# ＝土佐の民俗仮面展・調査ノート＝

# 仮面は生きている

梅野光興

高知県の民俗仮面を集めた企画展が4月末から当館で始まる。

「民俗仮面」という言い方は、あまり耳慣れないかもしれない。「土俗面」「民間の仮面」と呼ばれることも多い。要するに、中央の神社が持ち伝えているような美術品的な価値をもった仮面に対し、地方の寺社や一般の人びとが伝えてきた仮面群のことである。民俗仮面には、中央の仮面のような洗練された美しさや優れた技巧は見られないことが多い。だが、中央の仮面にはない素朴な美や荒削りの迫力がある。昭和40年代には、その素朴の美が注目されたことがある。その後、後藤淑氏や中村保雄氏らの仮面研究が進み、形態面や芸能史との関わりで仮面を考えていくという方向性も発達してきた。

大豊町大砂子新田神社の仮面
拝殿に並ぶ仮面のなかには、中世年号をもつもの、舞楽面風のものなど様々

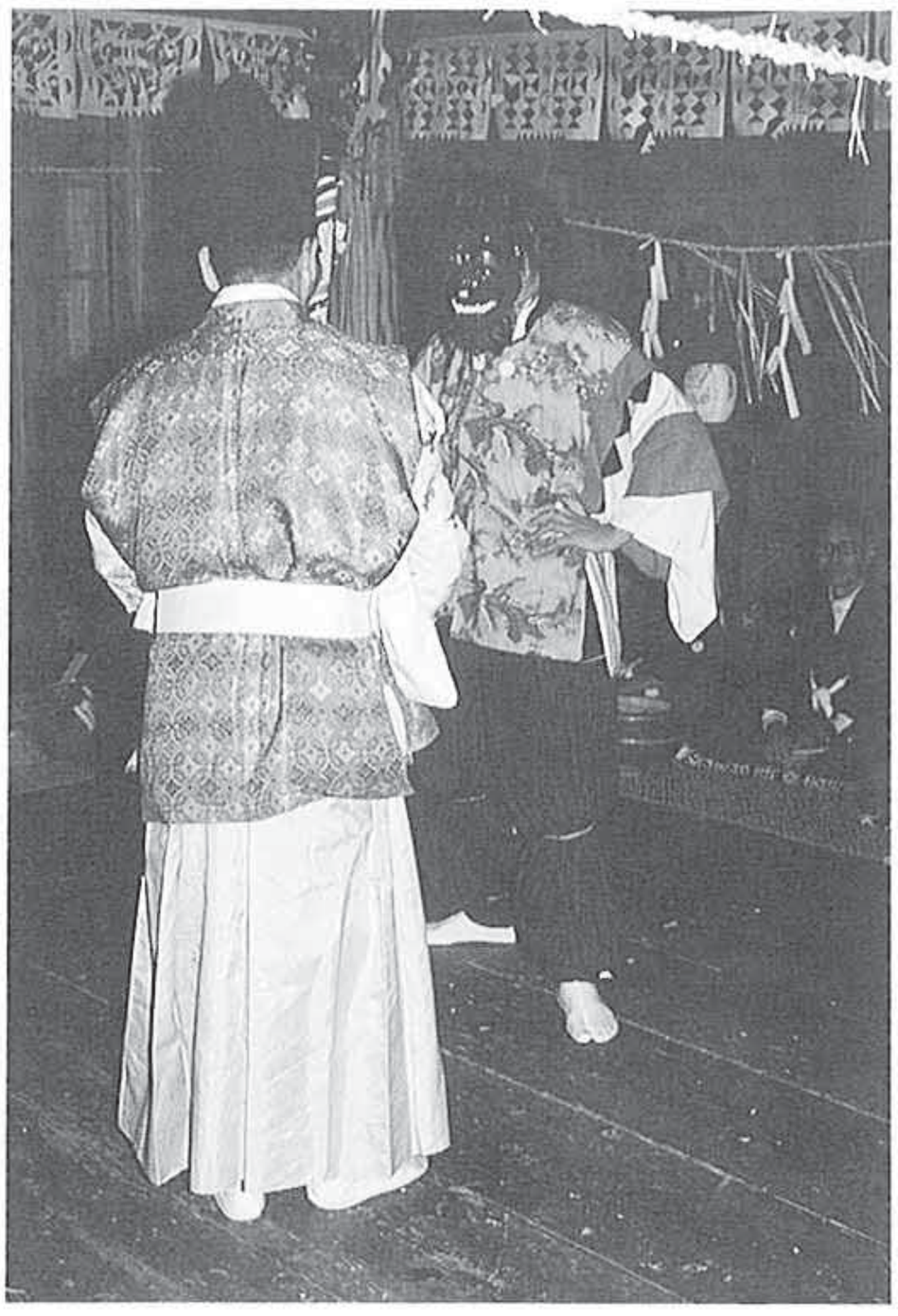
高知県にも、さまざまな民俗仮面が存在する。これまでに、当館の吉村淑甫館長や高木啓夫氏によるフィールドワーク、市町村レベルの文化財調査などによって具体的なデータが蓄積され続けてきた。今回の当館の調査も、それらの貴重な研究報告に頼るところが大きい。それらの報告に記されている仮面の所在をたずねて、県内をまわった。

仮面の多くは、山深い村の社や神殿の奥にしまわれていた。神楽のために年一回は出して舞うのだという面は良い方で、何年、いや何十年ぶりに陽の光を見たものも多かった。たいてい神社の所有になるので、地区長さんや総代さんをわずらわせることになる。数多くの人に助けられながら、仮面を見る日々が続いた。

はじめのうちは、ただ仮面の多様性、一つ一つ違う表情の多様さにすっかりとまどっていた。怒る顔、泣く顔、笑う顔、無表情…、無限の百面相である。様式が決まって型通りに作ることが多い中央の能面などに対し、民俗仮面はまったく形は自由である。もっとも最近では、多様さのなかに一定の決まりのようなものがあることもわかってきたが、その個性の豊かさはそんなことを感じさせない。日本中の仮面を見ればどこかに似たようなものがあるものだが、どうも他に類例の無い仮面があるのも高知県の仮面の特色である。

そして、民俗仮面のもつ迫力。技術的には決して優れていない面に、ともすれば美術品の仮面に劣らないパワーを感じることがある。

物部村では、面は神格視されていて大変あがめられている。面の機嫌をそこねないように気をつかい、定められた祭を今も欠かさない家が多い。持ち主の老人は「あの祭に（面は）5人出よった」などと、まるで人間を呼ぶかのように面に接する。そのような面を見ると、（家の中の薄ぐらい光のなかで見るせいだろうか）面が静かに息をしているような気がする。



名野川神楽の大蓍退治
いろりの煙のなかで演目が進んでいく。（吾川村宗津）

安居神楽を見たときのこと。静かに神楽の舞を見ていた観客たちが、大蛮が出るとわっと賑やいだ。病気祓いの信仰があるのか榊柴で肩にふれてくれいとせがむ老婆、「大蛮、負けちゃいかんぞ」と声援をおくるおっちゃん（大蛮は神に敗れる鬼なのだが）、お神酒がまわってきたのか見物のお年寄りやおばちゃんたちは、大蛮が近づくと子どものように大騒ぎ。あげくの果てには大蛮と抱き合う者まであらわれた。憎まれ役のはずなのに、大蛮は神楽の人気者だった。

馬路では、今も正月には仮面が家々をまわる。「家祈祷」の行事である。面の入った箱を背負った神職がスクーターで集落をまわり、家の床の間で祓いをしたあと面を付けて祈る。小さい頃はお面をみるのが恐くて、それでも祓ってもらわなくてはいかんと親に言われ、おばあさんの着物に隠れて泣きながらお祓いを受けたものだ、とある婦人は語った。

そんな風に仮面についての話を聞いたり仮面の行事を見ているうちに、どうして民俗仮面に力を感じるのか、少しわかったような気がしてきた。

それは、民俗仮面が人びとの生活や心情と結びついていて、人びとと共にあったということなのである。

**物部村笹の鬼面**
永禄6（1563）年の銘をもつ逸品で、村の危機に行う「鎮め」の儀礼に用いられた。

物部村の笹の鬼面は、近くの集落を疫病や度重なる不幸が襲ったとき、災厄を取り除くためその集落へ出かけていった。そして、太夫の唱え言によって魂を吹きこまれ舞人の体を借りて舞をまったらしい。あい続く病気や不幸のため不安の極地に追いこまれた村人の心を安心させるには、面は真っ赤な顔に金色の目、鋭い二対の牙を持つ「鬼」でなくてはならなかった。災いの原因がその鬼であるか、鬼の強大な力で災いを追い　払うのかわからないが、祭りでの庭で、人びとの願いを受けて鬼面は舞った。

村人の顔ぶれが時とともに変わっていっても、時に何百年もの長きにわたって木や紙の面は同じ顔で祭りの場に登場してきた。その時代時代の人びとの願いや恐れや笑いを受けて。

**大豊町岩原神楽の爺**　正式の舞人を真似て舞うひょうげ（道化）役の爺に、山里の人々の頬もゆるむ。

二百点近くの仮面たちが、この春に岡豊に集まってくる。このような展示は今後なかなか行われることはないだろう。あわせて仮面研究の第一人者である後藤淑氏による講演会や映画会も行われる予定である。

何百年もこの世の歴史を見つめてきた無言の仮面たちが、その静かな声で自分の見た事を教えてくれるだろう。

**物部村岡ノ内の仮面**
目のまわり、眉は黒で全面呪術的な赤色に彩られている。高知県ならではの代表的な信仰仮面のひとつである。

# ＝埋文企画展記念講演から＝

# 高知平野に見る韓国青銅器文化

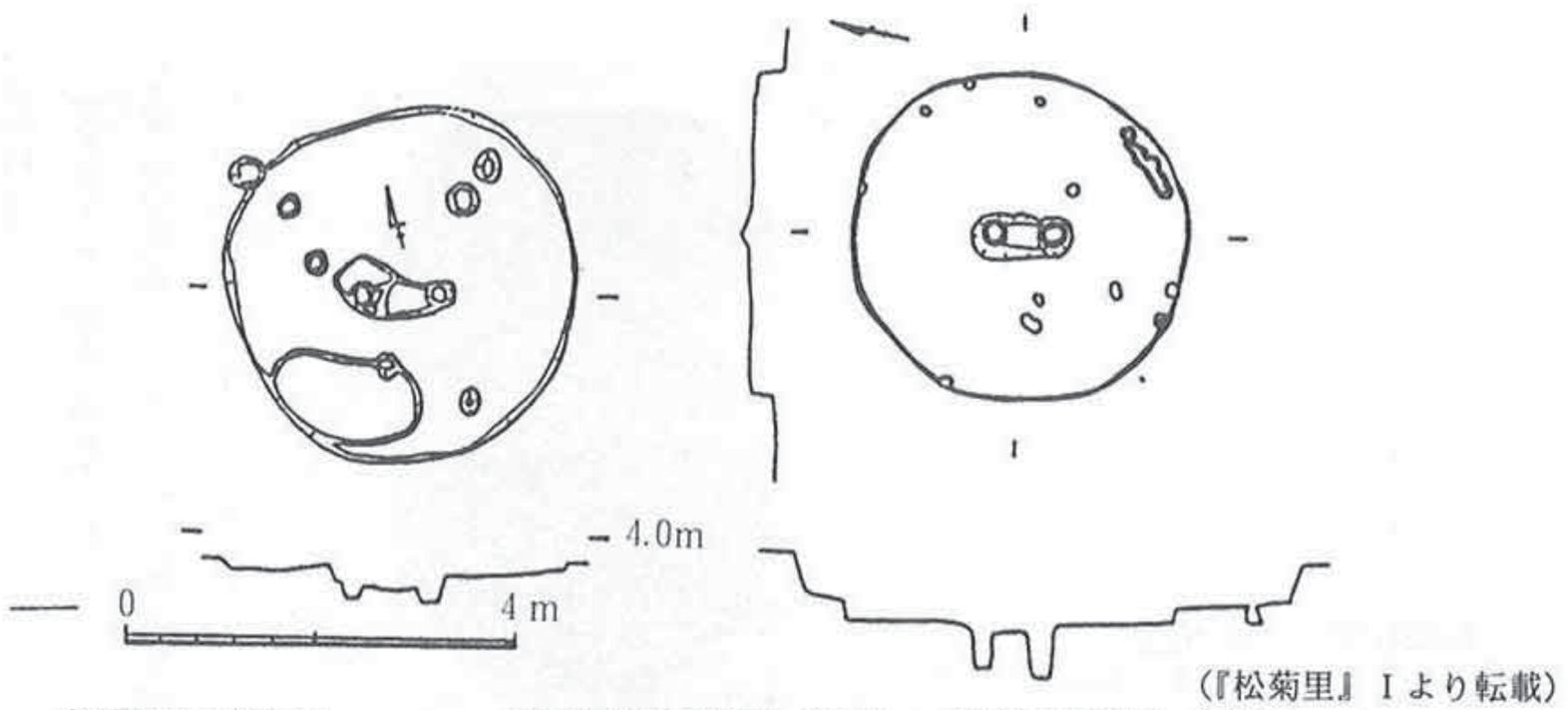
高知県教育委員会
文化振興課主幹　出原恵三

弥生時代の一般的な住居として竪穴住居がある。これは文字通り地面を数十センチ掘り下げて床をつくり、床面の中央に炉を設けてそのまわりに柱を立てて横木を組み垂木を斜めにかけ、その上に茅などをふいて屋根とするものである。最近では各地の史跡公園などで復元住居として接することも多くなった。これらは発掘資料をもとに土器や鏡などに残された原始絵画を参考にして建てられたものである。竪穴住居の形態や大きさは時代や地域によって異なる。たとえば平面形も円形、方形、楕円形などがあり、構造的にも炉を持つもの持たないもの、持った場合のその位置関係など各時代の住まいのあり方を敏感に投影している。また竪穴住居は弥生時代の所産のみではなく縄文時代、古墳時代さらにはあの『貧窮問答歌』に描かれているように奈良時代以降においても存在し続けたのである。竪穴住居は、我国の原始古代を通して庶民の住居形態の主流であったと言うことができよう。

このような竪穴住居は高知においても二百棟近く発見されている。その中に六例、一般的なものとやや構造を異にするものが含まれている。田村遺跡群に五例、春野町の西分増井遺跡に一例である。それがここで紹介する松菊里型住居と呼ばれているものである。この名称自体あまり耳慣れないものであるが、その由来は韓国忠清南道扶餘郡松菊里遺跡発見の竪穴住居にある。この住居の特徴は床面中央部に設けられた楕円形の土坑（中央ピット）とその両脇にある小柱穴である。住居の平面形は円形の方形の二者がある。

さて、この松菊里遺跡の属する韓国青銅時代（紀元前七〇〇年～三〇〇年）こそは、我国の弥生文化形成に極めて重要な影響を与えただけに意義深いものがある。この松菊里型住居は、弥生時代前期初頭から中期頃にかけて福岡平野と高知平野を中心として西日本各地で確認されつつある。楕円形の中央土坑と両脇の柱穴の機能については未だ十分な解答が出ていないが、このような構造が縄文時代の竪穴住居から導き出し得ない以上、また当該期の朝鮮半島と日本との関係を咀嚼するに彼国からの影響と考えるのが妥当であるろう。弥生文化の形成期、朝鮮半島からは新しい土器の製作技法、青銅器、大陸系磨製石器などなど物心両面に及ぶ文化が我国に伝えられたことは贅言を要しないが、新たに住居の形態までも伝播していることが明らかになったのである。

ここで高知平野で発見された松菊里型住居遺跡群の五例は、平面形が円形、方形の両者があり、西分増井遺跡例は円形である。時期的には前者の五例がすべて弥生時代前期初頭、後者はそれよりもう少し時期が新しいがほぼ前期前半に納まる。これらの松菊里型住居生活を営んだ集団は、朝鮮半島からの新しい文化を受容し紛れもなく高知平野に弥生文化を生成させた集団であった。この前期初頭という時期に限定すれば、この種の住居は今のところ高知平野と北部九州でしか確認されていない。更に方形の平面形を有する例は田村遺跡群の二例のみである。かかる現象を如何に解釈すればよいのであろうか。弥生文化の成立、展開については戦後一貫して北部九州と畿内とに焦点を当てた研究がなされてきた。少なくとも高知平野などは弥生文化の成立期の段階では埒外の地域と見なされて来た。しかし今後は松菊里型住居の分布からも明らかになったように、少なくとも弥生文化成立期において高知平野の果した役割はもっと評価されなければならない。




（『松菊里』Ⅰより転載）

松菊里型住居　　西分増井遺跡（左），松菊里遺跡（右）

## ―地域史を観る目―

# 歴史資料としての仏像彫刻

梶原　瑞司

歴史資料を求めて県下各地を訪ねると、古い寺社や小堂に祀られた仏像や神像の類を見ることができる。国の重要文化財をはじめとする著名なものを除くと、多くは特に注目されることもなく、信仰の対象としてひっそりと伝えられているものである。県内の仏像については、かつて故池田真澄氏が著わされた『土佐の仏像』（高知市民図書館刊）があり、多くの古仏が紹介されている。しかし今でも思いもよらぬ古い時代の作が、その価値を知られることなく祀られていることが少なくない。

個人所蔵の歴史資料は、所有者の代替わりなどに散逸したり、埋もれてしまうことが多いが、仏像については地域の素朴な信仰により守り伝えられ、火災等からも真先に救い出されることから、比較的現在にまで残されている例が多い。

ただ惜しいことには、長い歳月により虫喰や腐触、後世の粗悪な修理、彩色などでせっかくの優れた作風が大きく損なわれているものが大半なのである。殊に、時代判定に最も重要な顔の部分に手が加えられると価値は一気に失われてしまう。地域の人々にとっては、傷みのはげしい仏様では見るにしのびないと手近なところへ修理に出し、その結果平安時代の古仏が極彩色の現代仏に姿を変え、とりかえしのつかなくなった例も一、二にとどまらない。中世以前にさかのぼる可能性のある像については、やや経費は高額になるが、専門の仏像修理の技術をもった業者に依頼することである。そのうえで現状をできるだけ守りつつ、慎重な復元にとどめるべきであろう。

地域の暦史を考えるうえで、古代、中世にまでさかのぼりうる資料は極めて貴重なものであり、寺院を造らせた豪族の推定、信仰や美術的資料としての位置付けなどが可能であり、現在うかがい知れない優れた文化の跡が発見されることもある。ぜひとも現状の悪化を防ぎ、大切に保存の措置がとられることを望みたい。まずは湿気を避け、できるだけ通気が良く直射日光の当たらない場所に置かれることがのぞまれる。

次に、これらの資料を生かすためには、まず個々の仏像の価値を知ることが大切である。これまでは一見しただけでは区別がつきにくく、尊名も難解であることから、地域の資料調査でも敬遠されてきた嫌いがあった。

まずこれらを身近なものにすることが第一歩である。他の分野でもいえることがあるが、優れた作例にできるだけふれる機会をもち、自分の「見る眼」を養うことが必要である。京都や奈良などの公開寺院の諸仏はできるだけ自分の目で直接見ておきたい。春秋には国立博物館等で特別展なども催されており、国内外から優れた像が集められるので絶好の機会となる。

ただしあまりに短期間で眼を肥やそうとしても、限界があり、かえって感覚が混乱して失敗する。やはり大切なのは、まず自分が好きになることであり、時間をかけてゆっくり楽しみながら覚えていくようにしたい。そのうえで全国的なレベルから地域の仏像を見ていくように心がけている。室戸市、最御崎寺の大理石の如意輪観音像や、五台山竹林寺の渡海文殊像などがいかに貴重なものであるかが、あらためて知られるわけである。

仏像を、地域の歴史を見直す材料として生かしていきたい。

文殊菩薩獅子台座および侍者像
竹林寺蔵

## 本棚

# 山本大編『図説　高知県の歴史』

本書は、地域史の視点から日本歴史を把えなおすシリーズ、『図説日本の歴史』全四十七巻のうちの、第三十九巻である。

執筆陣は、県内の第一級の研究者であり、現在までの研究成果が盛り込まれた密度の濃い学術書である。また、カラー図版を多用し、図表や資料写真を盛り込んで、わかりやすい高知県の歴史の入門書ともなっている。

先土器時代から現代までの、高知県の歴史を通覧できるとともに、各章が明確なテーマを持っているため、興味の赴くままにどの章から読み進んでも楽しめる構成である。それぞれの章で選ばれたテーマは多彩であり、政治や産業、文化等のさまざまな角度から、高知県の歴史が描かれている。

序説の「土佐の先進性と後進性」においては、中央や他地域との関わりやその影響を論述し、それらとの比較を行う際に出てくる高知県の特色を浮き彫りにしている。

「稲作の始まり」の章において、寄進された弥生時代の「銅鐸が近世・近代において雨乞いに使われた実例」が紹介されているように、本書は連綿と続く歴史の流れを見せてくれる。

また、「焼畑の村の盛衰」に、「土佐藩の林業施策が強力に推進されるにともなって、焼畑農業はその犠牲になりながら消滅してしまった」とあるなど、民衆を含めた豊かな歴史世界を描き出している。

各所に挿入されたコラムは、知られざるエピソードや最新の研究成果、研究への取り組み等を紹介して啓蒙的である。例えば「伝説と偽物」には「伝説や偽書を信じて生きた人の生活史まで、否定することはできない」と、研究対象への幅広い見方が語られている。

本書を指標として、今回繰り返し各執筆者によって描かれている海国および山国としての高知県の歴史世界や、反対に今回あまり触れられていない中・近世考古学の成果の活用等、今後の高知県の歴史研究の可能性や課題が考えられていくのではないだろうか。

なお、巻末付録として、文化財一覧や年中行事一覧、参考文献等がある。

（河野淳子）

## 歴史散歩

# 谷家の墓

### 第三回

### ＜南国市岡豊町八幡＞

県道二五二号線沿いに立つ標識から小道を少し登ると谷家の墓地で、南東に面した日当たりの良い場所にある。石塔のない墓がほとんどで、自然石を積み上げた小さな墓ばかりである。谷家は前号で紹介した岡豊八幡宮の神職を受け継いだ家であり、多くの学者を輩出した。谷左近の時代には、長宗我部氏に仕えて武士となり、社領五〇〇石を拝領した。左近の墓には勉学の祖神と書かれ、現在でも、受験の合格を祈願する人があとをたたない。その弟神（甚）右衛門は、長宗我部氏の滅亡後、浪人し、慶長一六年（一六一一）に死去。二代目甚右衛門は野中兼山の絶大なる信頼を得て郷士の取り立て等活躍した。二代目甚右衛門の孫である谷秦山は谷家の学問を創始した人物であるが墓はここにはなく、土佐山田町植ぐいみ谷にある。この家系からは谷家の学問を隆盛させた谷真湖、幕末維新期に活躍し陸軍中将となった谷干城も出ている。（真湖の墓は高知市秦泉寺に、干城の墓は久万山にある。）

土佐電鉄バス新改線、白木谷線、小学校通り下車、徒歩一分。北へ二〇メートルのところに墓地への標識がある。

（曽我満子）

谷家の墓

# ニュース

## 企画展示室から

### 「土佐を掘る―第1回発掘された遺跡展」～一九八九・一九九〇年の発掘調査の成果から～

高知県教育委員会、（財）高知県文化財団埋蔵文化センターの共催により、一九八九・一九九〇年に発掘調査された遺跡から出土した遺物を写真パネルと共に紹介した。今回は、縄文時代から中世までの発掘調査された主要な遺跡の遺物を各時代順に展示。縄文時代では、日本最古の土器の一つである豆粒文土器を出土した十和村十川駄場崎遺跡の石器、土器を多量に出土した本山松ノ木遺跡。弥生時代では、竪穴住居跡や壷棺墓が検出された土佐山田ひびのサウジ遺跡の壷棺など、古墳時代では方形周溝墓を検出した春野町西分増井遺跡、野市町大谷古墳の出土遺物を展示。古代では、南国市土佐国府跡・比江廃寺跡・土佐国分僧寺跡、ひびきサウジ遺跡から出土した土器や絵の描かれた瓦、竈などを展示。特に古墳時代から近世までの遺跡中村市具同中山遺跡群では、古墳時代の勾玉などの祭祀遺物、古代の革帯装飾具、骨蔵器などを展示紹介し、講演会も三度開催した。

期間……平成四年一月一八日～平成四年三月一五日

1992.1.18 第3回企画展
土佐を掘る 企画展示室

1992年.1.18 第3回企画展
土佐を掘る 講演会 AVホール

# 〔歴民館日録〕

| | |
|---|---|
| 平成三年 | |
| 二月 六日 | 民俗展示企画コーナーにおいて「簑」の展示開始 |
| 二月一三日 | 高知県観光情報あったかネットワークのシステム稼働 |
| 二月一五日 | 第一回史跡巡り「安芸市・中芸の史跡と文化財」 |
| 二月二五日 | 企画展「近世 土佐文人画」展閉幕 |
| 二月二八日 | 点字パンフ作成 |
| ～三一日 | 収蔵庫燻蒸 |
| 平成四年 | |
| 一月 四日 | 消防訓練 |
| 一月一八日 | 企画展「土佐を掘る 第一回発掘された遺跡展」開幕 |
| | 企画展講演会 |
| 二月一五日 | 企画展講演会 |
| 二月二一日 | 第二回史跡巡り「仁淀村秋葉神社祭礼の練り」 |
| 二月二九日 | 企画展特別講演会 |
| 三月一五日 | 企画展「土佐を掘る」閉幕 |

第一回 史跡巡り
（田野町岡御殿）

# ユア・ボイス

今回は、先般実施したアンケート等に寄せられた、たくさんのご意見の中から一部を紹介いたします。

当館で印象に残ったものとしては、映像装置を組み込んだ「政談演説会模型」等の展示資料や各所に設置している映像資料を、多くの方があげています。映像資料の多用は当館の特徴であり、展示資料やその時代の流れ等を、ビジュアルにわかりやすく解説して効果をあげています。しかし、その反面「展示室内にある映像資料が、展示資料をじっくり見るのにうるさい。」とのご意見もありました。

この他、PRが効を奏し、企画展「土佐を掘る」を新聞やテレビで知った方が大半だという結果がでています。一方、館全体については「もっとPRを。」というご意見が示すように、その存在はまだまだ県民の皆様に浸透していません。開館後一年が過ぎ、目新しさも失われるこれからは、館蔵資料の整理等の地道な活動を続けるのは無論のことですが、より魅力的な企画を打ち出し、広報活動に力をそそいでいくことが、さらに必要となります。

アンケートにご協力いただき、ありがとうございました。

## 〔企画展の案内〕
## 開館一周年記念企画展
### 『仮面の神々』

平成四年四月二十九日（水・祝日）より五月三十一日（日）まで一階企画展示室にて開催します。

高知県には「神楽」などの民俗芸能や信仰行事に用いられてきた仮面が多数残されています。それらの仮面は、庶民の願いや祈りを知るための民俗資料として貴重なものですが、信仰に関わって神社などに保管されているため目にふれることはほとんどありませんでした。

今回の企画展では、多くの関係者の御協力を仰ぎ、二百点近くの土佐の民俗仮面を一堂に集めます。行道面、王鼻面、古能面、神楽面、神幸面、猿楽面、祈祷面など土佐の仮面の多様な姿を紹介します。そこから高知県の民俗文化の一端が少しでも明らかになればと考えています。

会期中には日本の仮面研究の第一人者である昭和女子大学教授、後藤淑先生に、全国の仮面から見た土佐の仮面の位置づけを講演して頂きます。また県内において民俗のなかの仮面を長年追い続けてこられた高木啓夫先生に神楽面を中心にしたお話をお伺いします。そのほかにも映像を中心にした展示解説、映画会を行います。

## ＜一周年記念特別講演会＞

日　時　五月二日（土曜日）
　　午後二時～四時まで
「日本仮面史から見た土佐の仮面」
昭和女子大学教授　後藤　淑　氏

### ＜特別講演会＞

日　時　五月一六日（土曜日）
　　午後二時～三時まで
「土佐の神楽面とその周辺」
高知県文化財保護審議委員　高木　啓夫氏

### ＜展示解説＞

日　時　五月一六日（土曜日）
　　午後三時～四時まで
「土佐の民俗仮面展」の内容を民俗行事や芸能のビデオを用いて解説します。
学芸主事　梅野　光興

※講演会、展示解説は人場無料で定員は八〇名です。
参加希望の方は、一週間前迄に住所氏名電話番号に希望日を書き添えて葉書にてお申し込み下さい。

### ＜映画会＞

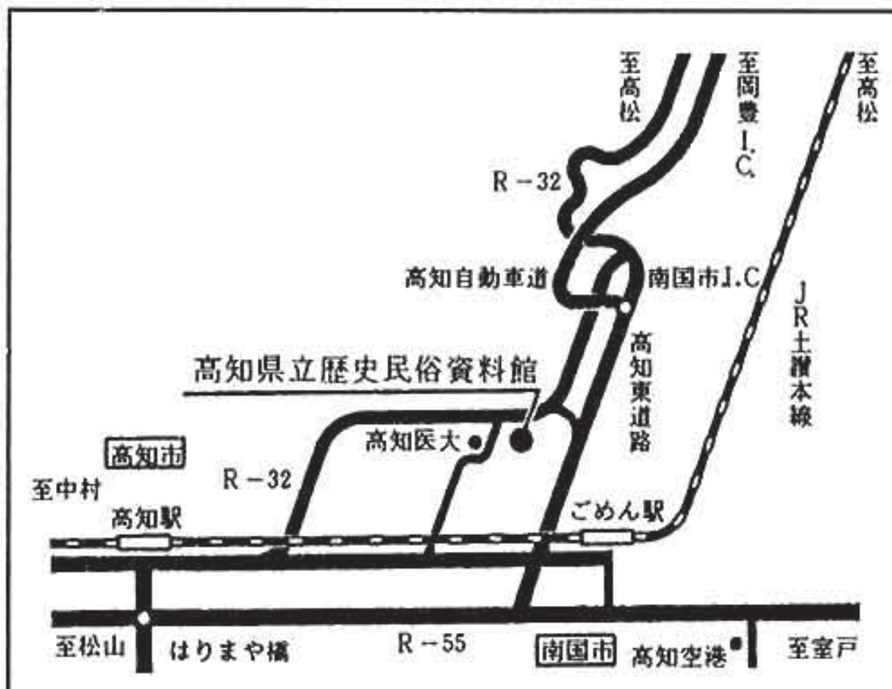
日　時　五月一七日（日曜日）
　　午前一〇時～午後四時まで
高知県内外の仮面行事を映像で紹介します。
愛知県の「花まつり」長野県の「雪まつり」なども予定。人場無料。当日自由に御来場下さい。

## ＜利用案内＞

**開館時間**　午前9時～午後5時
（入館は、午後4時30分まで）
**休館日**　毎週月曜日（祝日及び振替休日にあたる場合は火曜日）／12月28日～1月4日
**入館料**　一般・400円／中高校生・150円／小学
［常設展示］生・50円
団体（20人以上）割引きあり
（療育手帳・身体障害者〈1・2級〉手帳所持者とその介護者〈1名〉長寿手帳所持者は無料）

### 交通機関

高知市中心部から車で約20分。
駐車場（大型バス4台・普通車50台）あり。
バスを利用する場合は次のとおり。
［県交通］船岡南団地発歴民館行き終点下車。
領石・奈路・田井方面行き学校分岐（歴民館前）下車。
（徒歩5～10分で資料館へ）
［土　電］新改・白木谷方面行き岡豊橋下車。
（徒歩10～15分で資料館へ）




## ＜ひとこと＞

今回は坂本先生から「ばぶれ遍路」に関する原稿を頂きました。
また、出原氏の論考は、企画展関連講座での発表内容の一部を掘り下げて頂いたものです。今後も、このような講座をできるだけ多く開きたいと考えています。（下村）

県下各地に仮面の借用に伺っています。仮面の考古学的研究もやってみたいと思っています。（岡本）

仮面展の準備に大わら毎晩仮面に襲われる夢をみています。（梅野）

仮面展のあと寺田寅彦パートⅡ（仮称）開催の予定です。只今、館蔵資料の整理と出品資料の選定中です
（曽我＝旧姓　森本）

現在「くじら」と呼ばれています。秋に開催予定の鯨展の担当だからでしょうか。それとも……？（河野）

平成四年三月二〇日
編集・発行　高知県立歴史民俗資料館
〒783 南国市岡豊町八幡1099-1
TEL　0888-62-2211
FAX　0838-62-2110